

# 京都高等工芸学校の教育と幻燈

2012年の「1900年前後の幻燈画—美術工芸資料館所蔵写真乾板展」を覚えておられるだろうか。

当館には、現在26件、計1839枚におよぶ幻燈種版(ガラススライド)が収蔵されている。これらは、明治末から大正にかけて本学の前身校である京都高等工芸学校の教材として購入されたものであり、当時の様子だけでなく、20世紀初頭の日本における高等教育のあり方を知るうえでたいへん貴重な資料である。

もっとも購入年度が古いものは、ドイツ・ベルリンでスライドを製作・販売していたフランツ・シュテートナー博士Dr.

Franz STOEDTNERの「幻燈画」(AN.0690)100枚で、1902(明治35)年9月3日に初代校長の中澤岩太から学校が購入している。同校の開校は、1902年9月なので、まさに開校時の教材といえるだろう。購入当初の紙箱(図1)も保存されており、開校前に中澤が現地で購入した可能性もある。

このAN.0690のスライドには、マジヨリカ焼やマイセンなどの工芸品、椅子、棚といった調度品、ゴシックやロマネスク建築などの細部装飾から同時代の作品まで含まれており、ジャンルや制作地、制作期とも多岐にわたっている。なかでも、建築家ヴィクトール・オルタ(1861-1947)のアル・ヌーヴォー建築「タッセル邸」の吹き抜けの階段(図2)や、アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ(1863-1957)の室内装飾、ルネ・ラリック(1860-1945)のアクセサリーなど、当時最先端の建築家やデザイナーの作品が多く含まれているのが特徴である。全体的に細部を捉えた写真が多く、作品鑑賞が目的ではなく、デザイン、建築教育の参考資料という観点から選択されたこ



図1 「幻燈画」AN.0690の箱



図2 ヴィクトール・オルタ「タッセル邸」の吹き抜けの階段 AN.0690

とがうかがえる。

スライドにはそれぞれ白いラベルが2枚ずつ貼られており、1枚には活字で「Dr.FranzStoedtner/Institut. wissensch. Projektionsphotographie. Berlin NW.21.」と発売元を示す情報が、もう1枚には手書きで、被写体の作者、ジャンル、制作地や所在地、制作時代などがドイツ語で書かれている。

フランツ・シュテートナー(1870-1946)は、1895年にベルリンで、Institut für wissenschaftliche Projectionという研究所を設立し、学術的また教育的な活用を目的としたスライドの製作・販売をドイツで初めて手がけた人物の一人である。

ドイツでは、19世紀後半から写真を使ったスライドが登場していたが、教育機関において研究や講義に利用できるレベルのスライドはまだ少なく、種類もあまり豊富ではなかった。1890年代に入りフリードリッヒ・ヴィルヘルム大学の美術史教授であったヘルマン・グリム(1828-1901)が美術史の講義におけるスライド利用の有効性を主張したが、このグリムの教えを受けたのがシュテートナーであった。彼は大学のそばに研究所を設立し、美術史の講義をスライドの販売というかたちでアシストしていたものと思われる。彼の研究所で撮影・製作されたガラススライドのシリーズは、美術史、建築史だけでなく、民俗学、地理学、天文学、機械工学など実に多岐にわたり、1907年に販売カタログが発行された時点で14,000点にのぼるスライドが販売されていたとみられる。その後も数十万点におよぶ写真撮影が継続しておこなわれたようである。現在、このシリーズの一部は、そのカタログとともにドイツ国内の大学美術館をはじめ、欧米各地の大学に残されており、当時かなり普及していたことが分かる。京都高等工芸学校でも

1911年に622枚(AN.2171)、1912(大正元)年にさらに309枚(AN.2179)を追加購入している。

当時こうしたスライドはドイツ以外の国でも続々と発売されていた。中澤や浅井忠、武田五一ら図案科の初期の教員たちはカタログから必要なものを選び、日本の業者を通じて購入をしていたのではないだろうか。ガラススライドの存在は、当館所蔵の実物資料と並行して、写真が講義に積極的に使用されていたことを示している意義深い。日本の高等教育機関におけるガラススライドの利用の実態は、いまだ解明されていないが、その一端を示す貴重な資料といえるだろう。

さて、当館には浅井がその選定に関わったのではないと思われるフランス製のガラススライドも残されている。1905年に購入された「幻燈写真画—1900年パリ万国博覧会場情景」(AN.1010)67枚、1906年に購入された「幻燈影画—パリおよびパリ郊外風景」(AN.1012)20枚は、フランスのメーカー、E.MAZOによるもので、エッフェル塔や、グラン・パレ、各国のパビリオン内部、バウンススタイルの女性たちも写っており、当時のパリの様子や最先端のデザインの潮流が分かる。中澤や浅井らは1900年のパリ万博を視察しており、スライドを用いることで、教師と生徒間の視覚情報のギャップを埋めようとしたと思われる。

このほか1906年には「幻燈映画—台湾風情」(AN.1013)70枚が、1914年には「幻燈種板 建築工芸写真板」(AN.2239)208枚、「天然色板写真板(1.牡丹原色版 2.ツツジ原色版)」(AN.2240)2枚が購入されている。

また1913年には、島津源蔵から「幻燈種板 毛糸紡績用諸器械」などの繊維産業の機械や材料を写したスライドが354枚(AN.2223~2237)、1922年にはイギリスのMather & Platt Ltd.の「幻燈種板、染色各種機械」(AN.0095)70枚が色染科・機織科のために購入されている。

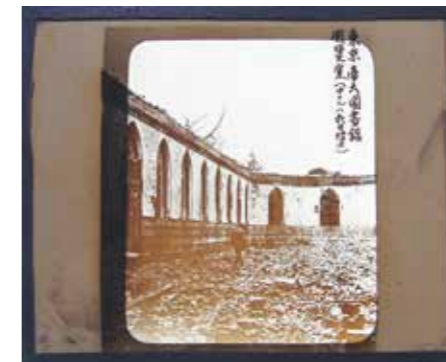


図3 東京帝大図書館閲覧室(中ナルハ武田博士) AN.2247-032

1923年12月に購入された「建築物震災幻燈影画」(AN.2247)100枚は、同年9月1日に発生した関東大震災直後の建築物の倒壊・破損状況が克明に写し込まれた貴重なスライドである。その頃京都帝国大学建築学科の教授となっていた武田は、日本建築協会震災調査特派委員団長として震災調査に尽力しており、現地を視察する彼の姿が写っている(図3)

1912年に購入された「美術工芸及建築写真原版」(AN.1554)16枚は、いわゆる原版で、京都府立図書館や京都商品陳列所など武田が手がけた建築物が写されている。

武田の指示で撮影された可能性も高い。このほかに「番外」とされているスライドも数十枚あり、日本の仏閣や仏像が写されていてこちらも興味深い。

また、これらのスライドを上映するために使われた1911年購入のドイツ、ゲルツ社製の幻燈機(AN.2172)も収蔵されている。

現在これらのガラススライドは、一枚ずつスキャンや撮影をしながら、データの蓄積をおこなっているところである。もう少し調査と研究が進めば、またその成果をご紹介します。

参考文献:

- [1] Haffner, Dorothee: "Die Kunstgeschichte ist ein technisches Fach." Bilder an der Wand, auf dem Schirm und im Netz., in Philine Helas, Maren Polte et al., Bild/Geschichte. Festschrift für Horst Bredekamp, pp.119-129, Akademie Verlag GmbH, Berlin, 2007
- [2] 前川 修「複製の知覚—スライド鑑賞の諸問題—」『哲学研究』570号、京都哲学会、2000年10月
- [3] 前川 修「美術史の目と機械の眼—スライド試論—」岩城見一編『芸術・葛藤の現場—近代日本芸術思想のコンテクスト』(シリーズ・近代日本の知 第4巻)晃洋書房、2002年

美術工芸資料館 和田 積希